2021年12月19日･佐土原キリスト教会･クリスマス礼拝説教
聖書箇所：ルカ福音書2章8～20節
タイトル：喜びの知らせ

クリスマス、おめでとうございます。礼拝を感謝します。皆様が主のご降誕をお祝いにお出で下さったことを、神様が喜んでおられると思います。

さて、皆様は、どのような思いで今年のクリスマスをお迎えでしょうか。コロナ禍のこともありますが、私は、今年、小さな病気を沢山しました。60歳になると人生が落ち着くような気がして、楽しみにしていましたが、60歳になってみたら、急に心身の健康の問題で悩まされることでした。(諸先輩方から「まだまだ今からですよ」と怒られそうですが…)。仕上げは 10 月の虫垂炎でした。痛みのない時の自分が想像できないくらい痛かったです。しかし神様が、驚くほど速く、つきっきりで癒して下さいました。いずれにしても、病気をして弱くされたことは「神様にすがることのできる恵み」を思うことのできた経験でした。同時に、祈りに支えてもらえる恵み、祈りに答えて働いて下さる神様の恵みを、改めて感じる経験でもありました。しかし、主イエスの誕生がなければ、神の恵みを経験することもなかっただろうと思うと、改めてクリスマスを感謝することです。今日、皆様の上にクリスマスの祝福を心からお祈り申し上げます。

今「ルカ2章8～20節」をお読み頂きました。イエスは、紀元前6年頃、イスラエルのベツレヘムでお生まれになりました。その時、その地方で羊の番をしながら野宿していた羊飼いの許に天使が現れます。羊飼いは恐れます。しかし主の使いは言います。「恐れることはありません…私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます…」(2:10～12)。天使は「すばらしい喜びを知らせ」ようとしたのです。先日インターネットで「何がめでたい？クリスマス」という説教を見つけました。私も今日「何が喜びか？クリスマス」という話をしたいのです。まず、なぜ天使は羊飼いに現れたのか。ある本にこうありました。「真夜中に羊の番を仕事としなければならないような、当時の社会の底辺層の人々…」。羊飼いは野宿を続け、体には獣の臭いがこびり付いています。また宗教の決まりを―(例えば「この日は出歩くな」という安息日を)―守ることが出来ません。それで人々からは「あの連中は神様から遠い連中だ」と言われ、自分達もそう思わされていたのです。その彼らに喜びの知らせが告げられたのです。その意味で天使が告げる喜びは、どんな人にも語られる喜びなのです。だから天使は「この民全体のため―(『全ての人』のため)―の素晴らしい喜び」(10)だと言いました。この喜びの与えられない人はいないのです。だからこれは、私達にも語られている喜びなのです。では、クリスマスはどんな喜びを語るのでしょうか。

9節に「主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた」(9)とあります。申し上げたように、彼らは「自分達は神に相応しくない」と思っていたから神を恐れたのです。日本人も後ろめたいことがあると「罰が当たる」と言って神を恐れます。でも私は、彼らの恐れは、色々なことを恐れながら生きている人間の姿を象徴していると思うのです。私の好きな歌に「もう笑わなくっちゃ」という歌があります。その中に「人はみんな、何かに怯え、生きて行くのか、それが定めなら…」という歌詞があります。私達は皆、色々な不安や恐れを感じながら生きているのではないでしょうか。皆様それぞれに、健康のこと、家族のこと、生活のこと、仕事のこと、将来のこと、色々と抱えておられるのではないでしょうか。そして、不安や恐れは、私達を様々に追い込んで行くのです。先程の歌は「悲しんでも仕方がないから、何も変わらないから、もう笑わなくっちゃ」と歌うのです。そういう見方もあるでしょうが、諦めとも言えます。しかし、天使は言いました。「恐れなくて良い、私は喜びを告げに来たのだ」。その喜びは「不安や恐れさえ追いやるような喜び」だと言うのです。では繰り返しますが、救い主、キリストの誕生が、どうい

う意味で喜びの知らせなのでしょうか。

申し上げ難いのですが、私は今年の 4〜5 月頃、あることをきっかけに心のバランスを崩して、食欲もなくなり、7kg 痩せて、病院で診察してもらったら「鬱です」と言われたのです。こんな話をすると「あなたは牧師でしょう。信仰はどうしたの」と言われそうですが、ストレスに弱い気質なのでしょうね。これは仕方がないです。でも苦しいのですね。苦しさに背中をおされて、インターネットで「鬱」に関する動画を色々探して見てみました。生き方セミナーのような講演で言われていたことは、「明けない夜はない。いつか、その経験を良かったと思える時が来ます」というようなことでした。「なるほど」とは思いますが、力がない。私が行きついたのは、あるご高齢の牧師の動画でした。その先生は聖書の「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:28)の言葉を読んで、こう語られました。「イエス様が『わたしの許に来なさい』と言っておられます。苦しくてどうにもならないような時は、神様を呼んで下さい。神様があなたのそばに来て、あなたを助けて下さいます」。「この方は、苦しくてどうにもならない状況を知っておられるな」と思いました。その時、一緒に読まれたのが「神は…試練とともに脱出の道も備えてくださいます」(1 コリント 10:13)という御言葉でした。「神が必ず脱出の道を備えて下さる、助けて下さる」、この言葉を握って祈りました。祈ることができる、すがりつくものがあるということは救いだと思いました。薬も飲みました。薬は幸せホルモン(セロトニン)の分泌を促して心を解してくれました。また、ちょうど礼拝のライブ配信が始まった頃でしたので、牧師の特権で説教をする中で神様に喜びを頂いたということもあります。いずれにしても、切羽詰まった中で、改めて神の中に希望を見ることができるようになった時—(あいは神に触れられた時と言っても良いかも知れません)—癒されて行ったのです。

私は、自分のつまらない経験からも思うのです。私達は「1 人で全てを抱えて恐れている」のではないでしょうか。ある本にこうありました。「私たちの生活には、自分の努力ではどうにもならないこと、取り返しのつかないことなどがしばしば生じます。自分の能力で解決できないこともたくさんあるのです」。自分ではどうすることもできないことがあります。誰かに助けて欲しいことがあります。しかし、その時、神に希望を持つことが出来れば、「神が何かをして下さる」と思うことが出来れば—(サメに左腕を食いちぎられたある女性サーファーは、神を経験して言いました。「神は、悪からでさえ善を生み出してくださる」。それが本当なら)—それは真の希望であり、救いではないでしょうか。

神は、恐れを抱えて生きる私達に神が、神の助けが、神の希望が必要だと知っておられたから、「旧約」の時代から「私があなたと共にいる」と言って来られました。「恐れるな、わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ 41:10)。「誰が傍らにいなくても、私が共にいる」。神は人と生きようとして来られました。

しかし問題が 2 つありました。1 つは、人の側にそれが分からなかったことです。神が大き過ぎる方だから、人には神の思いが分かりませんでした。だから、むしろ神を恐れたのです。しかし、だからこそ救い主イエスは、赤子として地上に来て下さったのです。赤子は、お世話してもらわなければ死ぬしかない。そんな姿で人間の世界に入って下さったのです。それは、赤子ならどんな人でも恐れなく近づくことができるからです。羊飼い達も「みどりご」と聞いて、しかも「飼葉おけに寝ておられる」と聞いて「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう」(15)と恐れることなく神に近づこうとしました。先週もお話したのですが、アメリカのある村の教会でクリスマス劇をしました。そこに「宿屋の主人の子供の役」を特別に作ってもらった男の子がいました。彼のセリフは「ダメだ、部屋はない！」でした。しかし彼は「ダメだ、部屋はない！」と言った後で、泣き出して「マリヤさん、ヨセフさん、馬小屋に行かないで。馬小

屋は寒いから、イエス様が風邪を引いちゃうから馬小屋に行かないで」と叫んで、マリヤさんにしがみついたのです。劇は滅茶苦茶になりました。しかし人々の心に忘れがたいものを残したのです。でもそのように、今も、子供でも救い主イエスに(もっと言うと神に)近づけるのです。長じたイエスは「父の許を出て行き、他所の町で身を持ち崩しボロボロになって帰って来た息子を喜んで迎える父の話」を教えて下さいました。この父は、ボロボロの息子に走り寄るのです。それは、私達が神様の方を向くこと待ち望み、私達に走り寄ろうとされる神様の姿です。イエス様によって人々にそんな神様の真実が分かるようになったのです。そして人が神に手を延ばそうとするようになったのです。

しかしもう1つの問題は、人には、人を神様から隔てる仕切りがあったということです。ある時、イエスの許に姦淫の現場で捕まった女が連れて来られました。指導者達は石を振り上げて「こういう女は…石打ちですよね。あなたはどう思うのか」とイエス様に迫りました。イエスは言われました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい」(ヨハネ 8:7)。「聖書」は「年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された」(ヨハネ 8:9)と語ります。「私には何の罪もない」と言える人は誰もいなかった。それは私達も同じではないでしょうか。ある人が話して下さいました。「私は『あの人は好かん、この人も好かん、好かん、好かん』と言っています。私の心を切ったら真っ黒だと思います」。私の心も真っ黒です。そんな罪ある私達と、聖い神様とは、本来一緒にいることはできないのです。私達の罪が神様との間を隔てるのです。しかし、だからキリストは、人となって地上に来て下さり、私達の罪の一切をその身に背負って、私達の身代わりになって十字架に架かって、私達の罪の始末して下さったのです。私達と神様との間の仕切りは取り除かれたのです。私達と神様の間に橋が架かったのです。天使は歌いました。「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」(2:14)。「御心にかなう人々」というのは「立派な人」ということではありません。「『イエス様、人の世に生まれて来て下さり、私の罪のために十字架に架かって下さって、ありがとうございます』という人」ということです。それだけです。それで私達は、このままで神の御手の中に入ることができて、神と共に生きて行けるようになったのです。神は、ずっと私達と共に生きたい、助けたいと願って来られたのです。それが、時が来てイエスの誕生で現実になったのです。だから天使が讃美した、それは神が喜ばれたということです。私達は、イエス様の誕生によって、神と共に生きることができるようになったのです。

神と共に生きること、申しあげたように、それは真の希望であり、救いです。卑近な例で恐縮ですが、虫垂炎になった時、夜中に家内に病院に連れて行ってもらって、そのまま未明の手術になりました。手術の立会人が必要でした。その日、家内の早朝の仕事が休みだったのです。私はそこにも神の御手を思いました。一昨年来て下さった福島の佐藤彰先生は、原発事故で苦しまれました。しかしこう言われました。「神の御手の中にいる、その希望があるから我慢できます。希望があるから待つこともできます。希望があるから私達は諦めません」。先生はまたご自分の体験から「涙を流す私達と一緒にいて下さる神様は、いざとなったら奇跡を起こされます」と語られました。先週も拉致被害者の横田めぐみさんのお父様、滋さんが、洗礼を受けてクリスチャンになられ、昨年、天の御国に凱旋された話をしましたが、「ブルーリボンの祈り」という本を読みました。お母様の横田早紀江さんが、めぐみさんが突然いなくなって、どんなに苦しまれたか、また20年後に北朝鮮によって拉致されたと分かった後も、何度も打ちのめされ、どんなに苦しまれたか、それが書かれてありました。しかし同時に、その中で早紀江さんがどれだけ神様によって支えられて来たか、それがご自身の言葉で証しされていました。「娘が行方不明になるという…悲しい出来事の中で…神様に出会わなかったら、私はとても耐えられなかっただろうと思います」。「神様が『しっかりしなさい、わたしがついている』と、ドーンと言って下さっている気がしたのです」。そのようにしてあの凄い活動をなさっているのです。これはインターネットで見たのですが、40年間、キリスト教信仰を否定

して来られた滋さんが「希望は神にある」と言って洗礼を受けられたことに触れて、早紀江さんは「神様は本当に不思議なことを為さる方だと思いました。だからめぐみのことも希望が持てます」と語っておられました。いずれにしても、神と共に生きること、それは色々なことがある日々の生活において、神から来る真の希望によって支えられ、神に助けられ、生きることができるということです。その希望は現実に私達を生かす力です。そのことを、私も確信を持って申し上げることができます。クリスマスは、それが現実になった時です。

しかし、それだけではありません。イエスは十字架に架かって私達の身代わりに死なれましたが、3 日目に甦られたのです。そして「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」(ヨハネ 11:25)と言われました。イエスを通して神に迎えられた者は「天国で永遠に生きる」という約束をして下さったのです。私達は必ず死にます。しかし神の御手の中に入るということは、地上の命が終わろうとも、御手に抱かれて天国に凱旋出来るということです。カナダである方の葬儀の司式をしている最中、ふと会堂の天井を見上げた時、その方を天に運ばれる神の腕が見えた気がしました。私は圧倒されました。子供を亡くされて「神なんかいない」と言って過ごして来られた方が、末期ガンで病院に入院し、亡くなる前に洗礼を受けてクリスチャンになられました。亡くなる時、「道が見える、天国への道だ」と言って天に帰って行かれたそうです。佐藤先生の教会の方が亡くなられ時、先生がそのお顔を見たら、そのお顔は笑っておられたそうです。佐藤先生は「『あぁ、イエス様に手を引かれて天国の門に立ったんだ』と分かった」と言われるのです。私達は、死にさえ希望を持って向かうことが出来るようになったのです。

「救い主が生まれた」という知らせは、「恐れるな、あなたも神の御手の中で神と共に生きることができるようになったのだ、生きるにも、死ぬにも、神の中に希望を見ることができるようになったのだ」という知らせであり、それは私達にとっても、素晴らしい喜びの知らせなのです。

今年は祝会がないので、お 1 人びとりに袋に入ったプレゼントがありません。すみません。しかしクリスマスの一番のプレゼントは、あなたのために生まれて下さったイエス様です、イエス様によって現実になった神から来る希望です、神の救いです。今日、お 1 人びとりに、そのプレゼントをぜひ受け取って頂きたいと心から願います。救い主イエスは、あなたのためにお生まれになりました。皆様の上に神の祝福をお祈り致します。